

東京湾とつむぎに生きる町

金沢区・柴町

昔からの漁師町

京浜急行、金沢文庫駅で下車、「柴町」行のバスに乗る。古くからある神社や家並みにまじって、洒落たづくりの出窓のある家々が建つまちなみをぬけ、終点まで行く。そこからさらに海にむかってしばらく歩いたところに、柴の漁港があるのだ。

柴町の歴史は古く、江戸時代から記録がのこっていると言う。この町に古くから住んでいる人に聞いたところでは、昔、富岡の近くの長浜という町に観音様があつて、多くの人びとが集まり、町ができていた。その町が津波で流されて、人びとがこの地に移りすんだ。これが柴町の始まりだと言ひ伝えられているそうだ。新編武蔵風土記稿には「あるいは小柴村ともいふ」と記されており、「小柴」とよばれることもある。三方を山に囲まれているこの町は、ちよつと外から見ただけでは、漁港のある漁師町があるとは分からないのではないかと思う。埋め立てられるまえは家の前がすぐ海だったため、山をぬけると海が目の前にひらけていたそうだ。今は漁港と、そこから沖にむかつて水路があるだけで、町は陸地に囲まれている。遠くキラキラと光る海が、この特殊な立地条件のせいもあつて、なかなか海だとは信じがたい。

いまだに本家と分家という血縁関係がのこっており、古い習慣や行事ものこっている。斉田、小山、黒川、森田、共倉など、同じ姓がこの町には多い。そのため、名字で呼んではまぎらわしいので、屋号で呼ぶ習慣があると言う。そういったことが、いわゆる「柴町気質」として、のこっているようである。

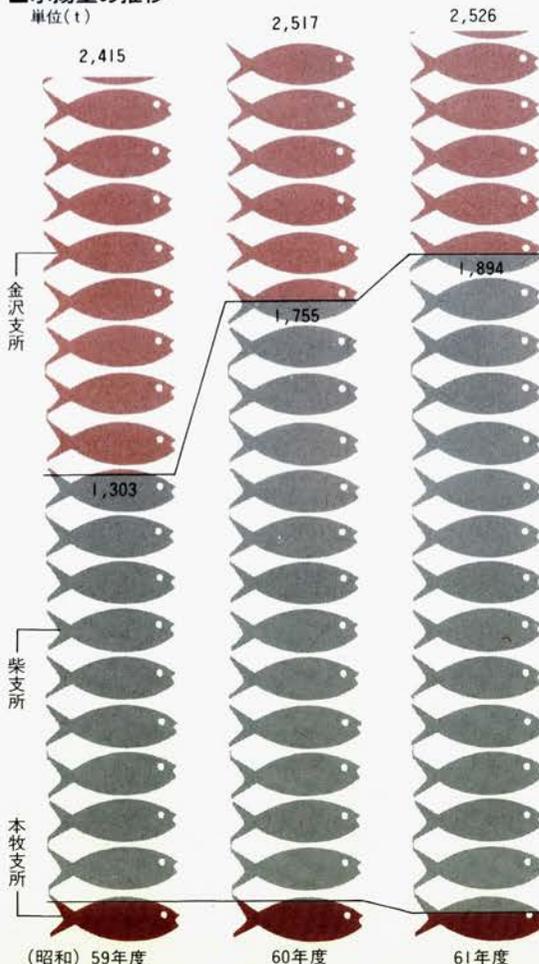
都市化と漁業

柴では、明治時代からノリの養殖、みる貝の採取、アサリの養殖など意欲的に取り組み、昭和20年代に現在の漁港をきづきあげるなど、積極的に漁業に取り組んできた。しかし、時代の流れはその港をも大きな陸地で囲んでしまった。そうして、埋め立て以前は釣り人が訪れるば

かりだったこの町の周囲にも、たくさんさんのマンションや家が建ち、人工砂浜のある「海の公園」の工事もどんどん進み、人の流れも変わってきた。古くから住んでいる人に加えて、新しく多くの人が入ってきたのだ。

埋め立てがきまつたとき、柴町と野島以外の漁業協同組合は漁業権を放棄してしまつたという。しかし、柴町は漁業を続けることにきめ、新たに漁業協同組合をつくつたのだ。今では若い人たちが就職後「Uターン」して漁業にもどることも多く、若い漁師が集まつて漁業の研究や改善を話しあう漁業研究会もつくられている。魚の生態を知ることが必要と、飼育や養殖などを続けている。昔からの「漁師魂」が脈々とうけ

■水揚量の推移



横浜市緑政局調べ

Town

つがれているようだ。

昔、夏の夕暮れにお年寄りが夕涼みに集まったという「熊野神社」。目の前には180度ずつと海が広がり、気持ちよい潮風がふいていたという。今、この場所へ行ってみると海は遠く、海岸線に沿って新交通システムの軌道が建設中で、近くの漁港の裏手には建てられたばかりの白い四階建マンションがある。少し歩いて行くと、明らかに新築と分かる2階建てのテラスハウスがずらつとならんでいる。

つい最近、引越してきた人に話を聞いてみると、「近くに海があり、公園があり、ヨットハーバーがあり、テニスクールもゴルフの練習場もある。バスで金沢文庫駅まで行くのがちよつと面倒だけど、それをさしひいても、じゅうぶんにすばらしい環境だ」と絶賛していた。

新交通システム「金沢シーサイドライン」は昭和64年夏に暫定開業する予定。開業すると、新杉田まで乗り換えもなくバスにも乗らず行くことができるようになる。埋め立てにより急激に変化した柴町はさらに変化していくことだろう。

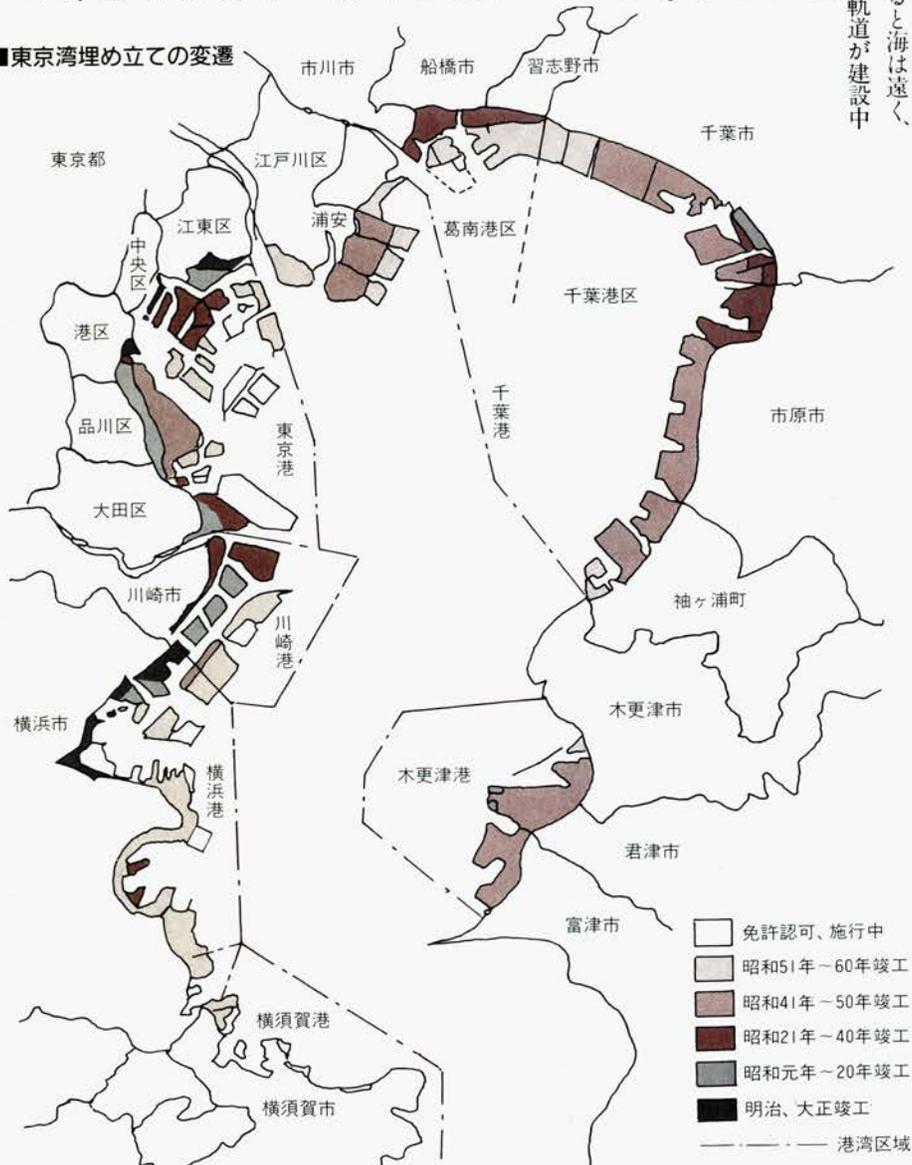
よこはま市民生活白書'88 ②「第3章」まち

「都市型漁業」をめざして

柴はもともと半農半漁の町だった。今でも畑の肥料にシヤコの殻が使われていることから、漁業と農業がバランスよく成

立していた。しかし、今は農業は自給自足程度にしか行われていない。海を開いている山にのぼってみると、昔はノリを乾かしたという畑が多くあるが、農業はそれほどさかんではない。

東京湾埋め立ての変遷



国土庁「東京湾西部臨海地域再開発構想基礎調査(昭和61年)」

Town

それに比べると、漁業は安定している。東京湾の汚染も一時ほどではなくなり、毎年漁獲高も平均しているし、効率もとてもよい。築地の魚市場で小柴のシヤコといえば、ちよつとしたものだ。鮎屋でもわざわざ「今日は小柴のシヤコがあるよ」と宣伝してから握ってくれるそうだ。柴の特産物は圧倒的にシヤコで、そのシヤコが豊富にとれるのである。柴は漁港として、確実に成功をおさめている。

「金沢区に漁港があることを知ってもらいたい」と、横浜市漁業協同組合柴支所が魚介類の直売所をひらいている。場所は柴漁港のすぐわき。土曜日と日曜日の午後1時から4時までひらいている。地元の人だけでなく、遠くからわざわざ車でくる人も多い。それほど新鮮なのである。これから多くの人が、この町を訪れることを考えて、もう少し規模を大きくするかもしれないと柴支所の人は言っている。柴は都市のなかで、生きていこうとしているのである。

横浜のはずれにある、知る人もあまりいない古くて新しい漁港。周囲が埋め立てられ、漁場がせぼめられても、東京湾の自然の恵みを求めて、活路を見いだしていこうとするまち。新しい人びと、新しい建物、新しい交通機関、新しいものがどれほどはいつてきても、柴町は漁業を続け、古い習慣をまもるだろう。

横浜の海の歴史が、港だけではなかったことを、このまちは教えてくれるのである。



海の公園と柴漁港